

# 続古事談における希望表現について

## ——古事談との比較を兼ねて——

柴田昭二  
連仲友

### 目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

### 一、はじめに

本稿は、別稿<sup>1)</sup>を受け、続古事談を研究資料として、それにおける希望表現<sup>2)</sup>の実態を説明しようとするものである。

ここで取り上げる「続古事談」は跋文に「建保な、とせの卯月のしもの三日これをしるす」とあるように、その成立は建保七年(一二二九)とされるが、著者については諸説があり明らかではない。古事談の著者源顯兼没後五年に、何人かが源兼の志を継いで記したのであるかと考えられる。内容はほぼ古事談と同じく、巻一 王道后宮(三六話)、巻二 臣節(五九話)、巻三 欠巻、巻四 神社仏寺(二六話)、巻五 諸道(四九話)、巻六 漢朝(一六話)、という六巻構成であるが、そのうちの巻三は諸本に欠巻であり、巻六は古事談にない「漢朝」を据え、唐玄宗、楊

続古事談における希望表現について

貴妃、白楽天など古代中国の話を記している。

古事談と続古事談の最も大きな差はその文体にあると思われる。すなわち、夙に藤岡作太郎により「体裁も頗る古事談とは異にして、文章もまた古事談が漢文仮名文相交りて極めて雑駁なるに似ず、終始流暢雅馴なる仮名文を以て一貫せり」<sup>3)</sup>と指摘されるように、漢字平仮名(諸本により片仮名のもの)混じり文の和文体というべき文体で統一された本文を持つ。

テキストには、岩波書店新日本古典文学大系41『続古事談』<sup>4)</sup>(川端善明、荒木浩校注)を用いる。

### 二、希望表現の構成形式

続古事談における希望表現の構成は次のようである。

「〜むと思ふ」	(四例)
「願」	(五例)
「祈」	(一八例)
「望」	(四例)

- 「請」 (八例)
- 「乞」 (二例)
- 「求」 (二例)
- 「ばや」 (二例)

この構成形式及びそれぞれの用例数を見て、最も特徴的なのが希望表現の主要構成形式の「欲」の用例が見られないことである。古事談には「欲」が四一例、「願」が三二例で「欲」が「願」よりも多く見られたが、<sup>5)</sup> 続古事談には「願」の用例が見られるが「欲」の用例のないことは両者の分量の差以外の要素を考える必要があると思う。

もう一つ際立つのは「祈」の多用である。「祈」は古事談においても五〇例見られ用例数が最も多いので、この時代の資料に比して、「祈」の多用において古事談と続古事談とは同じ傾向にあると見られる。その上で、古事談に少数ながら見られた「庶幾」「詔」「まほし」などの表現は続古事談に見られない。

### 三、各形式の用法

以下、各形式の用法を考察する。

#### 1、「むとおもふ」の用法

(1) 又右大将にの給、「歌をよまむとおもふ」に、かならず返し給べし。

(六二九頁 一一二五、二五)

この例(1)の説話の原拠は小右記・寛仁二年(一〇一八)十月十六日条。その原文に「太閤招下官云、欲読和歌、必可和者。答云、何不奉和乎」とあり、それを読み下したものである。もし古事談の編者なら「欲」の

まま表記することが考えられるが、続古事談は和文体に統一するため、「欲」を用いず訓読仮名表記の「むとおもふ」の形になったと思われる。なお、この用例は希望表現の分類においては希望の「説明」に当たる用法である。

(2) 為隆、事を奏しけるに、題目、事の外にかさなりて、うるさげに思食たりけるを、此次に申文のあるかぎり奏してんと思て、しらす  
がほにて申みたりけるに、 (六一五頁 一一一三、一一三)

例(2)は地の文の用例で、「為隆は、この折に申文のすべてを奏したいと思つて」の意と解され、主語は三人称で希望の「説明」に当たる用法である。

(3) 小野宮殿、うちまいりて、<sup>6)</sup> 九条殿にあひたてまつりて、「きたの宮の拜礼にまいらんと思に、雨のふりておまへのきたなくて、えま<sup>7)</sup>いり侍らず」 (六五一頁 二一五、四一)

例(3)は会話文における用例である。「北の宮の礼拜に行きたいと思つたが、雨が降って行けなかった」の意と解され、主語は一人称であるが希望の「説明」である。

(4) 恵心僧都の夢に、「極楽の阿弥陀をおがまんと思はば、この仏をみたてまつれ」とみ給けり。 (七四〇頁 四一六、一一〇)

例(4)は、「極楽の阿弥陀を拝みたいと願うならば、この仏をごらんなさい」の意と解され、二人称の主語が省略されて仮定形の用法で、希望の「説明」である。

## 2、「願」の用法

(5) 在衡申ていはく、「岐山魯水なを未能遊心。内教事、僧侶知らず、いかでか是非を申わき候はん。たゞし慈恩伝并に玄奘行状を見るに、是以自身疑一分不成仏云々願也」。

(六五七頁 二一〇、四六)

(6) 四十八年この山に籠て、大願を發して山の頂に堂を作て、阿弥陀の三尊をすへたてまつる。

(七三五頁 四一三、一〇七)

(7) 一説には、山蔭中納言、仏をつくらんの願ありて仏師をたづねけるに、

(七三八頁 四一五、一〇九)

(8) 願文は、大江匡衡つくりて、佐理宰相、清書せられたり。

(七五一頁 四二四、一一八)

例(5)から(8)における「願」「大願」「願文」は仏教用語で、何れも名詞用法である。

(9) 「いかなれば賢人にいたりては昔の跡をねがひ、よの事にをきては、当時のよろしきを用ひ給ぞ」 (八二三頁 六一一、一六九)

例(9)の「跡をねがひ」は動詞「願ふ」の連用形で、実動詞の用法である。

以上から見られるように、続古事談における「願」の用法は主に名詞用法である。仮名表記の実動詞用法が一例のみ見られるが、助動詞用法は見られない。一方、古事談には名詞用法、実動詞用法以外に、助動詞

用法も見られた。<sup>6)</sup>

## 3、「祈」の用法

(10) みづからの祈、父にこたふる事深くおもふべし、

(六七二頁 二一九、五六)

(11) 宇治殿の御祈に、頼豪阿闍梨まいりたりければ、

(七二七頁 四一五、九五)

例(10)(11)における「祈」は「の祈」の形で、「祈」の名詞用法である。

(12) 道昌これを聞て、暫奉迎て祈に、空くもりて、雨こゝろよくふりにけり。

(七四四頁 四一九、一一三)

(13) この病人、おもひまはして広隆寺にまうでて祈ければ、即癒にけり。

(七四八頁 四二二、一一五)

(14) 「先祖康頼、ねんごろに祈し心ざしにこたへて、」

(七六四頁 五十三、一二三)

例(12)(13)(14)における「祈」は実動詞用法である。このような実動詞用法は全一八例の中に一四例を占め、最も多い用法である。

(15) この僧都、水尾の帝の御持僧にて、広隆寺の別当なりける時、御業ありて僧都をめして祈念せしむる時、僧都申やう、

(七四二頁 四一八、一二二)

(16)こ、に勅使祈請していはく、 (七五五頁 四一二五、一一九)

例(15) (16)における「祈念」「祈請」は複合動詞で、これも実動詞用法である。

以上から見られるように、「祈」の用例には二例の「祈り」という名詞用法、二例の複合動詞の用法、それ以外の一四例は「祈る」という実動詞用法で、助動詞用法は見られない。この傾向は古事談における「祈」の用法とも一致するものである。

#### 4、「望」の用法

(17)「昔、参議を望し時、伊尹無用之由、申されき。今大納言の用否我心にあらずや」 (六五二頁 二一六、四二二)

(18)この人、納言をのぞみける時、八幡にまうで祈けり。

(六九九頁 二一四四、八〇)

(19)張喩、ねんごろにちかづかむ事をのぞむ。

(八三〇頁 六一五、一七四)

例(17) (18) (19)における「参議を望し時」「納言をのぞみける時」「ちかづかむ事をのぞむ」は何れも「　を望む」という形式で、「望」の実動詞用法である。

(20)「其事、道理を背ば、このたびの所望かなふべからず」

(六九九頁 二二一四四、八〇)

例(20)における「所望」は複合形式で、これは名詞用法である。

以上から見られるように、「望」の用法は一例の「所望」を除けばすべて「　を望む」という形式の実動詞用法で、助動詞用法は見られない。

#### 5、「請」の用法

(21)時の明匠、日ごとに請におもむく。

(七五一頁 四一二四、一一八)

(22)「元杲僧都、請雨経法をこなひける時、この門やぶれたり」と

(六五〇頁 二一四、四〇)

(23)父致中が請文をたてまつらしむ (八一四頁 五一四五、一六四)

例(21)における「請」は「招き」「招聘」という意の名詞用法で、例(22) (23)における「請雨経法」「請文」は専用名詞で何れも名詞用法である。

(24)子息家頼宰相、みづからの病のために、僧を請じて修法せしめけるに、 (六七二頁 二一九、五五)

(25)伝教大師、大和の三輪の明神を勸請して山王とす、とも申す。

(七二六頁 四一四、九八)

例(24) (25)における「僧を請じて」「明神を勸請して」は何れも「　を招く」という意で実動詞用法である。

(26)こ、に勅使祈請していはく、 (七五五頁 四―二五、一一九)

(27)夜更て、判官と云もの来て門をた、けば、盗人請取にきたると思て、門をあけて、 (八一六頁、五―四六、一六五)

例(26) (27)における「勅使祈請」「盗人請取」は「を請ずる」とは異なる構文であるが、これらも実動詞用法である。

(28)為隆、見すがほにて、「祭主大中臣某言申請天裁事」とよみきかせまいらせたりければ、 (六一五頁 一―一三、一三)

例(28)は、解状の形式で、「祭主大中臣某言し申し請う天裁の事」の意で、これも実動詞用法である。

以上から見られるように、「請」の用法は専用名詞の用法以外にすべて実動詞用法で、助動詞用法は見られない。

## 6、「乞」の用法

(29)女王、食物をあたへたびければ、乞者、「食物のみにあらず、きものを給へ」と申ければ、 (七五二頁 四―二四、一一八)

(30)女王、思惟の間、乞者、汚手を御簾の内にさしいれければ、 (七五三頁 四―二四、一一八)

例(29) (30)は「いずれも「乞者」という固定した名詞形式である。

## 7、「求」の用法

(31)檢非違使并に武芸の者、滝口にいたるまで、かの家をかこみてさぐりもとむるに、 (八一四頁 五―四五、一六四)

例(31)は「檢非違使たちはあの家を囲んで探り求める」の意で、これも実動詞用法である。

## 8、「ばや」の用法

(32)「この連歌は、清輔はなちては、たれかはつくべき」とて、「おりべのかみにこれをなさばや」とつけんずるなり (七〇四頁 二―四九、八四)

(33)重家そばより、「をりべのかみにこれをなさばや」とつけたるに、 (七〇四頁 二―四九、八四)

例(32) (33)は同一の説話に連続して現れた和歌の付け句における用である。「ばや」は「～したい」という意を表す助詞で、希望を「表出」するものである。和歌の表記として用いられた用例であるが、「ばや」は和歌にのみ見られ、普通の地の文と会話文に出ないことは古事談も同じ傾向である。

## 四、おわりに

以上、続古事談における希望表現の実態を考察してきた。続古事談の成立は古事談の著者源顕兼の没後五年で、作者は明らかでないが古事談を意識しながら和文体で統一した文章で説話集としてまとめたものと思

われ、古事談に比べてその文体的特徴は注目に値する。

続古事談の分量は古事談の説話数四六〇話に対して一八六話と少なく、これも一因であると思われるが、その希望表現の用例数は古事談ほど認められない。特に希望表現の代表的な形式である「欲」の用例のないことと、漢文訓読調の「庶幾」の用例が見られないことが印象的である。しかし、これも続古事談の文体的特徴の観点で解釈できよう。即ち、漢字表記の漢文体の「欲」は仮名表記の読み下し形式「くむとおもふ」に書き直されたのである。

「願」「祈」「望」「請」「乞」「求」は一部の名詞用法のほかに全部実動詞用法で、内心の希望を表す助動詞用法は見られない。

和文の助詞に「ばや」のみ見られ、しかも和歌での用例であり、普通の地の文と会話文には見られない。

全体的に見れば、続古事談における希望表現は、古事談のそれと類似する面がおおいに見られるが、文体の違いが希望表現にも反映されているといえよう。

#### 【主要参考文献】

荒木 浩『続古事談』解説(『新日本古典文学大系41 古事談・続古事談』)岩波書店 二〇〇五年一月

藤岡作太郎『鎌倉室町時代文学史』(藤岡作太郎著作集 第二冊) 岩波書店刊 昭和二十四年六月第一刷発行

#### 【注】

(1) 柴田昭二・連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第一〇九号』二〇〇〇年三月。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望に関し、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態

に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接的・過去の場合作希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望は」の形で、「希求」は「てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形「一人称」であり、「一人称」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称」であった。「一人称」は「一人称」であり、「一人称」は「一人称」であり、「一人称」は「一人称」である。

(3) 藤岡作太郎『鎌倉室町時代文学史』(藤岡作太郎著作集 第二冊) 岩波書店昭和二十四年六月第一刷発行(初出は、大正四年五月)。

(4) 川端善明 荒木浩校注『古事談 続古事談』新日本古典文学大系41 岩波書店 二〇〇五年一月。

(5) 古事談における希望表現の状況は柴田昭二・連 仲友「古事談における希望表現について」(『香川大学教育学部研究報告』第一部第一〇九号 二〇〇二年九月)参照。

(6) 前稿「古事談における希望表現について」第四頁。

(しばた しょうじ 香川大学教育学部教授)  
(れん ちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇二二年一月三〇日受理)